

和徳小学校日誌『記録簿』にみる明治20年代の 生徒たちの行状と生活指導

—校舎の内外における遊び（悪戯）を中心に—

A Study on the School Children's Behavior and Guidance Revealed
in Wattoku Elementary School's Diary ("KIROKUBO")

麻 生 千 明

Chiaki Asoh

はじめに

「学制」頒布の翌1873（明治6）年に青森県弘前に創立された和徳小学校には、古くからの多くの資料が現存している。そのひとつに『記録簿』と称する、1887（明治20）年から1892（明治25）年までの5年間の学校日誌が弘前市立図書館に保存されている。前稿⁽¹⁾では、その資料をもとに「和徳小学校日誌『記録簿』にみる明治20年代における学校管理の考察」と題して、同校の教場（教室）と生徒扣所を中心とする学校管理、清潔衛生の状況等について考察した。前稿に続く本稿では、同じくその『記録簿』を主資料に、同校生徒たちの校舎内外における遊びをはじめとするさまざまな行状（悪戯）や日常的な生活の様子、およびそれらと関わる生活指導の状況等について考察することにする。

ところで従来の日本教育史研究において、教育の対象である子どもに焦点をおいた研究はあまり多くはないが、例えば仲新編『日本子どもの歴史』シリーズの第5巻『富国強兵下の子ども』（第一法規 1977年刊）、石附実著『教育博物館と明治の子ども』（福村出版 1986年刊）、『唐沢富太郎著作集 1 児童教育史（上）』（ぎょうせい 1992年刊）等は、主として明治期の子どもの家庭や学校での生活状況について考察した書物である。それらの書では、子どもの遊び、玩具、読み物、演劇等の娯楽、家事手伝い、子守、しつけなど家庭や地域での生活、そして学校生活に関しては就学・在籍状況、学年暦、儀式、運動会、学芸会な

どの学校行事、教室での授業や試験等についての考察がおこなわれている。しかし特に学校生活についていえば、教則、教科書、学年暦、生徒心得等を資料に、学校教育のフォーマルな面の考察が主であり、休み時間や放課後等における遊び、悪戯やいたずら、喧嘩争論など、日常的な行状やリアルな生活実態については必ずしも十分に浮き彫りにされているとはいえないように思う。どうも子どもたちの日常のリアルな生活実態については、その様子について詳細に記録した学校日誌等によって明らかにするしかないであろう。その点、和徳小学校の学校日誌『記録簿』は、当校の教師たちが毎日巡視番を定め、その巡視番教員が生徒たちの学校での生活行動、様子などを詳細に記録しており、問題行動についてはその対応策等の意見も記している。したがって生徒たちの学校生活のリアルな実態をうかがい知るうえで極めて貴重な資料である。以下、本稿では、同校生徒たちの校舎内外における遊び（悪戯）をはじめとする様々な行状について考察することにする。

なお和徳小学校について考察する前に、明治初期の教科書や生徒心得、教育雑誌の記事等を資料に、児童の遊戯や運動に関する言説について考察することにする。

1. 明治初期の教科書、教育雑誌等にみる遊戯・運動

(1) 『小学読本』（文部省 1873年・明治6年刊）に
みる遊戯・運動

1873（明治6）年、わが国最初の読本教科書

『小学読本』が文部省より刊行されている。その教科書はアメリカのウィルソン・リーダー (Wilson Reader) を翻訳した、いわゆる「翻訳教科書」であるが、学校生活に関する内容も少なくない。そのなかに子どもの遊戯・運動のことも随所に出てくる。例えば「学校にありて、稽古するものには、必ず、遊歩の時間あり、○此時間には遊歩場に出て、思ひのまゝに遊歩して、身を動かし、心を慰むべし、○勉強することあれば、遊歩するも、楽しみなり、遊歩を、楽しみと思はゞ、稽古の時間は、怠らず、勉強すべし、」⁽²⁾ と、授業の間の休憩時間には遊歩場に出て適度な運動をおこない気分転換することを勧めている。

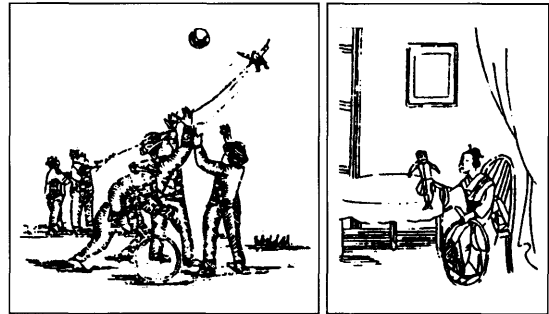
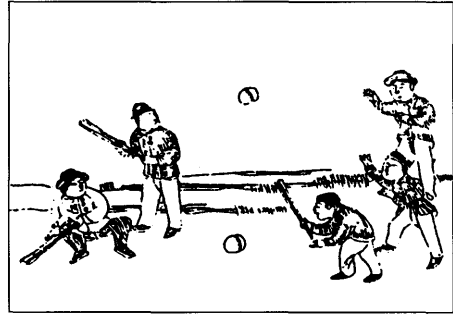
なお同様のことは、「小学生徒心得」等にもみられる。例えば1878 (明治11) 年、東京府より出された『学校読本 小学生徒心得』には、家庭での心得、登・下校時および学校での心得等が全22ヶ条にわたって書かれているが、その第十七条に「学文をなすとも身體健康ならざれば其栓なかるべし常に左の條件を守りて自ら病を招くべからず」として「第一 課業畢る毎に體操場に出て運動をなすべし」とあり、さらに「第二 運動をなすとも奔走すること度に過ぐべからず…第六 冠物なくして炎天を冒し跣足にして雪中を行くべからず」と健康保持上の心得が書かれている。

さて『小学読本』には、男児と女児の遊びについて書かれている。すなわち「遊歩場に出で、男児の、遊び戯るゝことは、種々なれども、総て、危き遊びを、なすべからず、○輪を廻はし、又は、風を揚げ、又は、球を投ぐるなどを、宜しとす、○相集りて、遊ぶときは、自分も楽しみ、朋友も、楽しむべし、女子の遊びは男児と異りて、駈け走るなどの遊びを、なすべからず、○朋友と、連れ合ふて遊ぶときは、睦しく親みて、何事も、物利かに、なすべし、」⁽²⁾ と、男児の遊戯として輪回し、風揚げ、球投げなどがあげられ、一方女子は「駈け走る」など動きの激しい遊びはふさわしくないと書かれている。さらに河での小舟遊びや風あげに続いて、球遊び (ベースボール) について次のように書かれており、挿絵も添えられている。

彼れは、球を蹴て遊べり、汝は、それを見しや、○私は、棒を以て、球を打つを見たり、

其球は、堅きものなるや、○これは、柔かなる、球なるゆゑ、人に當るとも、傷けることなし、○小児等は、球遊びを好めり、○それは、遊ぶに、善きことなれども、終日遊ぶべからず、又熱き、日には、長く遊ぶべからず、強き熱きに触るべからず、然るときは、身を害ふものなり、⁽³⁾

『小学読本』における挿絵



一方、女子の遊びとして人形遊びと輪回しのことが次のように書かれている。

此女子は愛らしき人形と、輪を持てり、○汝は、輪と、人形を好むや、○汝は、人形を、大切に弄ぶや、○此女子は、輪を廻はす為に、棒を持てり、○輪を、速かに廻はすには、速かに、走らざるを得ず、⁽⁴⁾

また冬の遊びとして氷滑りについて書かれている。すなわち「今日は、寒き日和なり、○雪が地上にも樹にも、池にも、積れり、○小児は、氷の上を、滑べることを好めり、○此遊びは、甚だ危きものゆゑ能く心を用ゐるべし、○もし、氷より落つることあれば、身を傷ふべし、○善き小児は、此危き遊びを好むことなし、」⁽⁵⁾ と、子どもは氷滑りを好むが、大変危険なので余程注意するよう

にと書かれている。

このように、わが国明治期最初の教科書『小学読本』には、男女児の遊戯についての記述が豊富にみられ、適度な遊戯運動は健康上にも益あることとして奨励されていたことがうかがわれる。次に教育雑誌における遊戯・運動に関する記事について考察することにする。

(2)明治10～20年代の教育雑誌記事にみる遊戯・運動の奨励 ―「活発ハ児童ノ天性」―

明治10年代の後半期は、ペスタロッcher主義の開発教授法が普及するが、その代表的指導書が1883(明治16)年に刊行された『改正教授術』であった。その書の冒頭には「活発ハ児童ノ天性ナリ」との有名な文章がある。以後、教育雑誌の論説記事等をみると、活発性、活動性こそは児童の天性であるとの認識のもと、児童の遊戯や運動を奨励する論調がみられる。例えば「児童ヲシテ学校ヲ信愛セシムベキ方法」と題する『教育時論』の記事には「元来児童ノ性タルヤ遊戯運動ヲ好ムモノナリ然ルニ教師タルモノ矢鱈ニ児童ノ静肅ナランヲ欲シ遊戯ノ時間中ト雖ドモ強テ教場ニ留メ置キ剩ヘ朝ヨリ放課ニ至ル迄児童ノ嗜好慣習及ビ其天性ニ反対ナル事ニ従ハシメ軟弱ノ脳随ヲシテ過度ノ勞ヲ執ラシムルハ只ニ教育ノ本旨ニ戻ルノミナラズ児童ヲシテ学校ヲ倦厭スルノ念ヲ萌生シ随テ教育上ニ大障礙ヲ来スヲ免レザルベシ」⁽⁶⁾とある。すなわち教師が児童に対して過度に静肅を強要したり、朝から放課時間まで教場に留め置くことは児童の「嗜好慣習」に反することであり、教育の本旨の悖ることであり、また学校に対する倦厭の念を生じさせるもとでもあると指摘している。そして適度な遊戯を奨励し、児童にとって学校を愉快な場所とすることが就学の向上をはかるうえでも極めて大切であると述べている。

なお、上記文中、幼弱の児童を長時間教場に留め授業をおこなうことは「軟弱ノ脳随ヲシテ過度ノ勞ヲ執ラシムル」ことであるとの指摘がみられるが、1880(明治13)年公布の第2次「教育令」においては、児童の精神衛生の観点から一日の授業時間までが規定されている。すなわち同「教育令」は、国民教育の教育課程の確立状況に対応し、就学義務に関して、従前のように単に年数や期間

で示すのではなく「小学科三箇年ノ課程ヲ卒」⁽⁷⁾るべきことを第十五条で規定し、さらに第十六条で年間授業日数を「三十二週以上」⁽⁷⁾と規定するとともに、さらに1日の授業時間について「三時ヨリ少カラス六時ヨリ多カラサルモノトス」⁽⁷⁾と規定している点が注目されるのである。そしてその理由について、条文改正の説明のなかで「現行ノ令(注…1879年・明治12年公布の「教育令」)ニ於テハ一日の授業時間ニ制限ナキカ故ニ纔カニ一時間ニ滿タサルノ授業ヲ以テ法律要スル所ノ開校日数ニ充ツルモノアリ是ノ如キハ其名アツテ実ナキモノトス」⁽⁸⁾と、教育の効果上、1日3時間以上は必要と規定するとともに、また上限を6時間とした理由については、「或ハ速効ノ功ヲ貪リテ一日八時間余ニ及フモノアリ是ノ如キハ児童ノ心性體質ニ適セス徒ラニ倦怠ヲ生セシメテ終ニ益ナキノミナラス却テ健康ヲ損スルノ害アリ」⁽⁸⁾と、年少児童の「倦怠」の限度が6時間であることと、心身の健康上の配慮からであった。

また1881(明治14)年に公布された文部省令達「小学校教員心得」の第五項には「教員タル者ハ宜ク特ニ起居飲食等ノ常度ヲ守リ散鬱及運動等ノ良規ニ循テ其身心ノ健康ヲ保全シ以テ其職務ヲ尽スノ地ヲ做サンコトヲ務ムヘシ」⁽⁹⁾と、教授や学校管理を職務とする教員に対し、心身の健康保持のため、規則的な生活と「散鬱及運動等」を勧めている。ところでこの「教員心得」は、起草者江木千之が「第二項以下は、概ねウィッケルシャム氏及ジョホノット氏等の教育学説を参照して出来上ったもの」⁽¹⁰⁾と回顧しているように、ウィッカーシャム(Wickersham, James Pyle; 1825～93)の“School Economy”(1867)とジェームス・ジョホノット(Johonnt, James; 1823～93)の“Principle and Practice of Teaching”(1879)を参照して起草したものであった。このように明治初期は、西欧教育学説の影響のもと、児童や教師の精神衛生についての強い配慮がみられた時期であった。教育雑誌記事等においても、休憩時間等に生徒に適度な遊戯・運動を奨励する論調の背景には、そのような心身の健康や精神衛生を重視する時代思潮があったといえよう。

さて教育雑誌の遊戯・運動に関する記事をみていくことにする。先と同じ『教育時論』に「児童

の精神教育」と題する記事があるが、「児童の天性快活にして、時に或は山野を馳せ回り、時に或は種々なる遊戯をなし、時に或は昔話などを聴きて、無上の快樂となすは、児童が平生の状態なり。児童は身体の發育、盛んなるが故に、斯様に運動と遊戯を好み、男児は輪廻、独楽、紙鳶等に耽り、其余念なきときは、殆ど日の暮るるをも、忘れんとする程なるべし、女児も亦其遊戯に耽るときは、男児と異なることなかるべし。」⁽¹¹⁾とある。すなわち児童がいろいろと活発な遊戯運動に没頭するのは、まさに發育期にある児童の天性であるとし、特に男児の遊戯として輪廻、独楽、紙鳶等があげられている。

次に「小学生徒遊戯方に就きて」と題する『教育報知』の記事も、まず冒頭に「活発ハ児童ノ天性ナリ」との文章をあげ、「児童ノ天性ノ活発ヲ擅ニスルコトヲ得ルモノハ遊戯ヲ措テ外ニ在ルコトナシ」⁽¹²⁾と述べる。しかるに現状について、「方今小学校ノ遊戯場タル多クハ不便且狹隘ニ失シ為メニ群童ヲシテ各自好ム所ノ遊戯ヲナシ天性ノ活発ヲ縦ニセシムルコト能ハス剩サヘ是レハ「イケナイ」其レハ「アブナイ」ト抑制セサル可ラサルコトノミ多シ蓋シ授業中ハ幾分カ児童ノ活発ヲ抑制セサル可ラザルモノナレハ遊戯中ハ成ルベク彼レ等ノ欲スルマ、ニ活動セシメスンハアルヘカラサルニ方今ノ如キ遊戯場ノ構造ニテハ到底十分ノ活動ヲ許スコトヲ得ス」⁽¹²⁾と、遊戯場が狹隘で不備であること、また危険等の理由で必要以上に児童の遊戯を抑制している問題を指摘している。そして遊戯場は少なくとも児童1人当たり3坪以上の広さを必要とし、それを数区に分画し「鞦韆場、綱引場、射的場、當独楽場、毬ツキ場、羽子ツキ場、競走場、等其ノ他適宜ニ命名シ（勿論遊戯ノ種類ヲ擇ムハ必要ナリ）彼レ等ヲシテ随意ニ其ノ欲スル所ノ場ニ就キテ遊戯セシムヘシ」⁽¹²⁾と述べている。

このように教育雑誌記事では、「活発ハ児童ノ天性」との児童観に立って、休憩時間等における生徒の遊戯・運動を奨励しているが、また自由に放任して過激、乱暴な行為に走らないよう教師による監督の必要性も強調する。しかるに現状は、「休憩時間至レバ教師ハ皆扣所ニ在リ遊歩場ニハ生徒相摸スルモノアリ疾走スルモノアリ土石ヲ擲

ツモノアリ…或ハ他ノ乱激ニ畏懼シテ徒ニ場隅ニ竝ムモノアリ…教師ハ曰ク活発^(ママ)ノ児童ノ天性ナリ故ニ干渉セサルナリ…トコレ尤甚キモノナリソノ較可ナルモノニ至リテモ教師ハ只遊歩場ニ散歩スルノミ…」⁽¹²⁾と、教師の干渉を非とし、まさに放任状態であると指摘している。同様の指摘は「遊戯場ノ利用（郵寄）」と題する同誌の記事にもみられる。すなわち「翻テ諸学校ノ景況ヲ見ルニ、遊戯時間ニ至レバ教員直ニ扣所ニ入り、喫烟談話ニ時ヲ移シ、生徒ノ遊戯如何ノ如キハ監督者其人ニ放任シテ復タ顧ミザルモノ少ナカラズ」⁽¹³⁾と、休憩時間に教師は教員扣所で喫烟談話に耽り、生徒の遊戯等に全く注意を向けていない実状が指摘されている。

(3)明治30年代の教育雑誌記事にみる遊戯・運動 ——『教育実験界』を主資料に——

教育雑誌上、児童の遊戯や運動に関する記事は、明治30年代になると一層多くみられるようになる。季節や休憩時間に応じた適切な遊戯・運動についての論及も、より詳細になるとともに、教師による監督指導の必要性も一層強調されるようになる。例えば1904（明治37）年刊の『教育時論』に「休憩時間の運動場」と題する記事がある。ここでは休憩時間の使用法について、「此の時間に於ては、体力は之を使用するも敢て支障なきのみならず、之が使用に、心力の疲労を忘れて、益甚だ多大なり、故に此の時間には、児童をば悉く運動場に出でしめ、活発に、敏捷に餘念なく他意なく、遊戯運動せしめ、以て心力の休養をなすと同時に、体力の養成に務むべきや論なきなり、」⁽¹⁴⁾と、全ての児童を運動場に出し、適度な遊戯運動をさせ心身の疲労回復をはかることを奨めつつ、「されど遊戯運動にして、児童のなすがまゝに放置せんか、其の結果や遂に如何、夫れ児童は事理の判定に識少ければ、遊戯運動の性質如何に拘らず、危険なるをも辞せざるべく、卑猥なるをも避けざるべし、是監督指導の必要ある所以なり、」⁽¹⁴⁾と、児童の為すがままに放任していれば、危険な遊びや卑猥な遊びをも行いかねないゆえ、教師による監督指導の必要性を強調している。

なお明治30年代には教育雑誌の種類も増え、そのひとつに『教育実験界』なる雑誌が刊行される

ようになる。その雑誌は、雑誌名が示すように、学校現場での教育実践に密接にかかわる記事が豊富に掲載されており、児童の遊戯、運動等に関する記事も少なくない。そのいくつかを紹介しよう。例えば「休憩時間に於ける児童取扱法」と題する記事は、季節に応じた遊戯の種類について述べている。すなわち夏季の炎天下においては「活発なる運動遊戯等は奨励せず、可成児童の自然的活動に任せ、樹陰に於て、唱歌の遊戯をなさしむるとか、兎に角静寂なる遊をなさしめ」⁽¹⁵⁾るのが適切であり、「彼徒らに休憩時間の運動場を賑はせんため、炎天のしかも紅塵万丈天日暗きが如き運動場にありて、徒歩競争をなさしめ、或は、フットボールをなさしむる等のことは、決して策の得たるものではなからふと思ふ」⁽¹⁵⁾と述べ、一方冬季は、室内で暖をとるなど、とかく行動が不活発になりがちであるから、むしろ「走ることを基本としたる遊戯即ち運動量の多き遊戯を奨励して行かねばならぬ」⁽¹⁵⁾と述べている。また始業前、授業の合間、昼食後等、それぞれの休憩時間に適した遊戯についても言及している。すなわち始業前は心忪爽快にして運動欲も盛であるから「成るべく、児童の自己活動に基く遊戯即ち教師殊更に干渉せず、為す様なものをなさしむるがよい」⁽¹⁶⁾と述べ、授業の間の休憩時間も同様であると述べる。ただし昼食後の休憩時間は長いので、運動場に出て団体的な運動、例えば「綱引、フットボール、陣場取、源平旗取、旗送り、^(ママ)垂鈴運、等随分児童の好む様なものも多いから、種々工夫して、やると中々面白い」⁽¹⁶⁾と述べている。ただし雨天の場合、雨天体操場や児童休憩場等の設備のない学校においては「徒らに他級に往来して乱暴を働き、机間を駆け廻りて机を倒すとか、障子、硝子等を破り、廊下を走せ廻りて、騒動をなすとか、随分、好ましからぬことを演ずるものであるから、此点に就ては深く注意を払はねばならぬ」⁽¹⁶⁾と述べている。ところでそこに指摘されているような状況は、多かれ少なかれ、全国どの学校でもみられたものと思われる。千葉師範学校付属小学校主事小池民次は、「教授時間中に不注意なる、放課時間中に悪戯を為せる、教授時間と放課時間とを問はず兎角訓誡命令に違背して、頻々教師を煩せる児童は往々何れの学校にもありと聞けり。」⁽¹⁷⁾と述べて

いる。なお次に考察するが、そのような状況は和徳小学校においてもみられた。

次に「適当なる遊戯法」と題する記事は、某地方における、夏季休暇の8月を除いた各月の男女別の主な遊戯について紹介したものである。各月の遊戯を表に整理すると次のようになる。⁽¹⁸⁾

月	男児の遊戯	女児の遊戯
4月	ベースボール	泥人形作り
5月	ベースボール、毬撃鬼	四月に同じ
6月	毬撃鬼	鬼、男に同じ
7月	鬼、物隠し	男に同じ
9月	物隠、早飛ばせ	物隠、土砂を集めて鏡餅を作る
10月	早飛ばせ、学校	手毬遊び
11月	学校、相撲	柱付き鬼
12月	相撲、はち巻き取り	毛糸細工
1月	はち巻き取り、綱引き	(無記)
2月	鬼	一月に同じ
3月	ベースボール	毛糸細工、泥遊び

上記の遊戯の「百中の九十九迄は彼等の相互に成せる自然的遊戯」⁽¹⁸⁾であり、特に教師が教えたものは希有でという。それら各月の遊戯は、いずれもまず季節に対応しているという。すなわち3月から5月にかけての最も快適な季節には、男児はベースボールのような「規律正しい遊戯」に興じ、5月以降の向暑の頃は、やや不規則な動きの「毬撃鬼」に興ずる。「毬撃鬼」とは、鬼が毬を以て他を投撃し、撃たれた者は鬼になる遊びである。そして7月の炎天下においては「物隠し」「早飛ばせ」「学校」など、木陰での「智を要する遊戯」が適当であるという。なお「物隠し」は、地上一定の範囲を定め、組を分けて金木石を地中に埋め、他組をして探させる遊戯であり、「早飛ばせ」は、地上に方1尺位の方角を作り、その中に縦横各三線を引き、各人5個の石を持ち、2人ずつ相対線の交差点を経て自己の1石が他の2石の間に挟まれないよう他に早く着石をもって勝ちとする遊戯であり、「学校」とは、地上に4箇の円形あるいは方形を描き、これを1年2年3年4年と命名し、

石をそのなかに投じ、それを蹴り出して勝敗を決する遊戯である。そして11月以降の寒さに向かう季節には、むしろ「相撲」「はち巻き取り」「綱引き」「柱付き鬼」等のような「勇敢な遊戯」がよいと述べる。

なお上記の遊戯には、地方の慣例や慣習に倣ったものもある。例えば4月は農閑期で婚礼祝儀が多い季節であるが、女兒の「泥人形作り」は、冠婚葬祭を模倣した遊戯である。また1月の「綱引き」は、古来、1月15日に各戸より縄を集めて大綱を作り、夜に壮少の男女が集まっておこなっている当村の慣習が児童の遊戯として取り入れられたものである。また11月の「相撲」は、当地より大阪に登った力士が帰村し、名開きとして相撲をおこなうのを模倣したものであり、10月の女兒の「手毬遊び」は、生徒たちが修学旅行で熊本に行った時に見聞し、ゴム毬を買い来って行われるようになったものであるという。このように一地方の例であるが、児童の遊戯は、季節に応じ、性別に応じ、地方の慣習を取り入れ、いろいろな模倣による等、いろいろの経緯でおこなわれるようになったものである。

また同誌に「随意遊戯」と題する記事がある。冒頭に「小学校児童が規定の時間中教室に在りて、一定の規律の下に種々の課業を受く、其精神と視力との疲労察するに余りあり、故に放課中は必ず屋外に出だし活発に大氣中に運動せしめ、先きに疲労せし精神視力の恢復を図らしめ、徒に佇立閑話して時間を空費せしむべからず、」⁽¹⁹⁾と、遊戯運動は心身の疲労回復のためにも大切であると述べる。ただし現今、多くの学校でおこなわれている遊戯は、団体遊戯や規則が複雑な遊戯であったり、また広い場所を要するものが多く、短時間に手軽におこなえるものが少ないと批判する。そして短い休憩時間には、指揮監督を要せず小人数で自発的におこなえる遊戯が適切であり、それを家庭遊戯中より選定するのが適当であるとし、以下のような遊戯を奨励している。

●戸外遊戯

鬼遊各種、宝取、陣取、捕虜、狼、猿、金の棒、棒ねぢり、鮎の瀧登り、擬戦、縄飛び、猫と鼠、猫買ひ、飛び、石けり、まりなげ、こ、なんもんめ、これなんぼ、よりこ、しん

まき、子買ふ――、丁々ばんちよ、中の中のかぼんさん、朝顔、手毬、糸とり、風船玉、向ふの嬢さん、てんでこてん、せっせっせ、びんしやん九ツ、国とり

●室内遊戯

手毬、糸とり、てんでこてん、せっせっせ、十六むさし、はさみ象棋、いろはかるた、砂ふき、けりこ、石なご、おじやみ、貝すくひ、竹かへし

その他、主に食後の休憩時間における遊びとして綱引、旗取、豆囊各種の競走、団体運動、教訓歌骨牌、綴字骨牌、算術骨牌等をあげている。

最後に『教育報知』掲載の「新年の娯楽と教育」と題する記事を紹介する。まず「男児の遊戯としては、飛風尤可なり身体を寒風に曝し、四肢運動して体育上尤可なり、竹馬に乗ること好し、竹馬は身体を正直にし、重力の中心を保つ故脊髄を正しくするに尤妙なり、輪を廻し、綱を引く等屋外に遊戯を快濶になさしむべし」⁽²⁰⁾と、健康に有益な男児の屋外の遊戯として風、竹馬、綱引き等をあげている。一方「女兒の娯楽は、羽子を搗く尤可なり、此の遊戯は女兒の身体手足頭部迄活動し、全身運動を為すものにて、教員たるものは、よろしく羽子搗の遊戯を奨励し、啻に新年の遊戯たらしむるのみならず、女子には老幼を問はず、平素此の遊戯を為さしむべし、」⁽²⁰⁾と女兒の遊戯として羽子板をあげている。なおそれらの遊戯は、新年のみに限らず平素の遊戯としても推奨している。その他、特に『教育実験界』には、個々の遊戯法について紹介説明した記事も少なくない。

以上、教科書、教育雑誌等を資料に、遊戯・運動に関する言説について考察してきたが、それでは一体、和徳小学校における生徒たちの遊びや行状、生活の様子はどうかであったであろうか。『記録簿』を資料に、校舎外と校舎内とに分けて考察することにする。

2. 和徳小学校生徒たちの校舎外における遊び

(1) 校庭（遊戯場）における遊戯・運動の奨励

教育雑誌記事等でも、授業の間の休憩時間には校庭に出て適度な遊戯・運動を勧める論調がみら

れたが、和徳小学校においても、天気の良い日には、なるべく遊歩場（校庭）に出て遊ぶことが奨励されていた。1887（明治20）年10月13日の日誌に

天気ノ善キ日ニハ休時間ニ各級生徒ヲ遊歩場
タシト思ハル
ニ出シテ遊ハシメシヲ望ム

との巡視番教員の意見が記されている。ただし運動が過度になることは戒められていた。1889（明治22）年4月25日（木曜）の日誌に「日永ニ相成候ヘハ八時ヨリ始業仕候テ如何ニ為哉余リ朝ニ於テ徒ラニ遊戯致サセ置キ候テハ脳力衰微致シ可惜光陰ヲ費シ誠ニ速成ニ思ハレ…」とある。春から夏にかけての日中が長くなる時候には、とかく早朝の始業前に長時間遊ぶ傾向があり、それが子どもたちの身体や脳力の疲労を招くことが懸念されており、それを防ぐために始業を8時に早めたらどうかとの意見が記されている。

それでは和徳小学校においては、子どもたちは一体どのような遊びをおこなっていたのであろうか。上述したように、わが国最初の教科書『小学読本』に、輪廻し、球遊び（ベースボール）、氷滑り等についての記述がみられたが、それらの遊びは和徳小学校においてもみられた。まず輪廻しであるが、1892（明治25）年6月17日（金曜）の日誌に「生徒ハ往々校門外ニ於テ（放課時間ニ）遊戯（輪廻シ杯）ヲナシ居ルモノアリ御教誡ヲ乞フ遊戯器具ハ該級中ノ生徒二三名ヲ指定シ貸付スルヲニシタシ」と記されている。すなわち生徒たちが放課後に校門の外で輪廻しに興じていたことを報じているが、場所が校外の路上で、危険でもあり教戒を加えるよう各教師に要望している。

次にベースボール（球遊び）であるが、1890（明治23）年4月14日（月曜）の日誌に「最景晴天にもなりたれば時々旗取り競争縄引競争ベースボール等ノ遊戯ヲ行フベシ右遊戯ハ干涉主義的ニ奨励的ニ且規律アル様ニ行フベシ」との記述があり、旗取り競争、縄引競争とともにベースボール等の遊戯が奨励されている。また日誌に「放課時間ニハ成ルタケ競争ニ関スル遊戯ヲナサシムベキ」（1888年・明治21年10月26日 金曜）との記述もみられるように、放課後には競争的遊戯が奨励さ

れていた。ただし1890（明治23）年4月29日（火曜）の日誌には「生徒扣所ニ於テベースボールヲ禁スベシ」とある。ベースボールは当然戸外でおこなうべき遊戯であり、それを生徒扣所でおこなうことについては禁止させたことが記されている。

また『小学読本』には氷滑りについての記述もみられたが、雪国である弘前では氷滑りなどの遊びも盛んにおこなわれていたようである。次は1892（明治25）年12月8日（木曜）の日誌である。

放課時間ニ生徒ノ街道ニ出テハ氷上ヲ滑リ居リ通行荷馬車ナドニ乗ルモノ往々アルヲ見受ケタリ然リ而モ馬夫ノ為メニ叱咤セラレ或ハ手綱ヲ以テ打タレタルモノモアルカ如シ実ニ生徒ノ所為ニモ甚タ不都合ナル事ト考ヘマス獨リ生徒ノ不都合ノミナラス本校生徒ノ閑理上ニモ幾分ノ欠点ナキヲ能ハス尚馬車ノミニ止ラズ通行人ノ妨ヲナスヲ以テ街道ニ居テ群集ニテ遊ヒ居ルハ本校ノ如キ通行者ノ多キ所一應禁ジテ如何ナルモノニヤ敢テ諸君ノ公論ヲ待ツ

すなわち生徒たちは放課時間に街道に出て氷上滑走をしたり、荷馬車に飛び乗ったりして遊んでおり、馬夫に叱咤されたり手綱で打たれたりしていたことが記されている。人や馬車などが行きかう街道での遊びは大変危険であるだけでなく通行の妨害にもなり、生徒管理上も問題なので禁止するようにしたらどうかと提言しているのである。また同年12月14日（水曜）の日誌には「校門外ニ於テ（放課時間ニ）坂乗リヲナセル生徒中ニ一年生二年生三年生ヲ見受タリ」とある。「坂乗リ」とは、氷結した坂道を滑り下りていたのであろうか。このように冬季の積雪期には、氷上の滑走等の遊びに興じていた様子がうかがわれるが、校門外の街道で遊ぶ傾向があったようである。

ところで『教育報知』に「雪国に於ける児童の遊戯」と題する記事がある。それは北海道視学官山田邦彦が、北海道の児童たちに雪を恐れない風習を養うべく、雪国の遊びについて提案したものである。それによると氷滑り等は広く行われていたようであるが、その他、雪踏み（学校入口など

の道を列を作って踏み固める), 雪細工 (例えば雪達磨, 雪人形, 雪の建築, 山川, 動植物など), 雪合戦など工夫し, また「日曜日や祭日などに晴れの雪遊び (雪運動会) を企るも一興ならん」⁽²¹⁾と述べている。その山田の提案について, 記事子は, そのような雪中の運動は, 健康上にも有益であり, 欧米諸国等では盛んにおこなわれているが, 「然るに我が降雪地方の人々は, 敢て雪を恐るゝとにあらねど終日炬燵を擁して何等の運動をもなすことなし」⁽²¹⁾と, とかく家に閉じこもりがちな人々の通弊の矯正のためにも, 雪中での運動遊戯の奨励を極めて必要有益なことと評している。

(2) 危険な遊び, 危険な場所での遊びの禁止

和徳小学校では, 街道での氷滑りのほかにも危険な遊びがみられた。例えば学校の内外で小石を投げたりするのも日常的だったようである。以下の記述は, いずれも『記録簿』からの抜粋である。

校門ノ外ニ出テ石ヲ弄スルノ癖アリ之レヲ矯正センヲ (明治23年5月20日 火曜)

生徒門前ニ於テ土石ヲ擲ノ聞アリ時々御諭アリタシ (明治23年7月8日 火曜)

庭前ニ於テ小石ヲ擲ツ生徒アリ御教訓ヲ乞フ (明治25年4月6日 水曜)

このように生徒たちが石を投げたり弄んでいたのであるが, 同校の校庭には小石が多く散乱していたことも要因のひとつだったと言えよう。次は1891 (明治24) 年3月27日 (金曜) の日誌であるが, 校庭の石は, 通行の妨害にもなっているので, 裏庭に片付けるなり, 何とかしてもらいたいと要望している。

庭内ノ小石ヲ扣所ノ後ヘテモ片付サセタキモノナリ往々四方ニ散在シテ歩行ノ妨害ヲスルヤウニ考ヘラレマス依テ全庭ノ掃除スルト共ニ扣所ノ後ヘテモ取方付ケタキモノナリ

なお小石ばかりでなく玄関前には大きな石があり, 通行の妨害ばかりか, 怪我を招く危険もあっ

た。次は1890 (明治23) 年5月14日 (水曜) の日誌であるが, 小使いに命じて片付けさせるなり, 早急に対策を講ずるよう訴えている。

玄関前乃チ本校ノ前庭ナル高石ハマサカ岩木山ノ御蔵石ニハ非ザレモ生徒日々往来ノ際数妨害シテ負傷スルモノアル様ニ見受ケマス加之此儘ニシテ置カバ本校主務者ノ不注意ラシク見ヘマスカラ願クハ速ニ小使ニ命令シテ高石丈モ打鎮メ平坦ノ地トナシ…

また同校では, 工事のため土留めがあったようで, 生徒たちがその土留に登って遊んだりしていたようである。1889 (明治22) 年7月1日 (月曜) の日誌に「全生徒ニ目今建設シ居リタル土留ニ上ラザル様嚴重ニ御諭訓ヲ乞フ」とある。さらに3日後の7月4日 (木曜) の日誌には「校舎ノ基ノ傍ラ土留ニハ穴カボツ々アリマスカー一度御申付アリテハ如何」と, 土留めの穴を何とかしてもらいたいと要望している。ところで生徒たちは相変わらず土留めの所で遊んでいたようで, 2年後の1891 (明治24) 年7月4日 (土曜) の日誌に「往々土留ノ柵ニ生徒ノクグリコナル遊戯ヲシテ居レリ尤モ放課時間ニ多ク見受ケタリ嚴禁シタキモノナリ」とある。

その他, 危険な遊び, 危険な場所での遊びについて以下のような記録がみられる。

クルミ中デ遊ハ危キ遊ニシテ且爭論ヲ始ムルヲアリ学校デハ止メタシ (明治21年10月10日)

生徒旗竿ニ上リ橋ノ欄干ニ上ルモノアリ嚴重御諭達アリタシ (明治22年9月18日 水曜)

生徒池ノ邊ニ行テ遊戯ヲナスモノアリ又土屏ノ上ヲ超ヘタリスルモノアリ御注意ヲ乞フ (明治23年3月31日 月曜)

このように旗竿に登ったり, 橋の欄干に上がったり, 池の縁で遊んだり, 土塀を超えたり等, とかく危険な場所で遊んだり, 危険な遊びをすることは, 冒険心と活動性に富む小学生の年頃の傾向

性である。ともかく怪我や事故等を防ぐべく、危険な場所での、危険な遊びは禁止するとともに、学校の環境を整備することも和徳小学校の課題であった。次は1890（明治23）年6月26日（木曜）の日誌である。

本校遊歩場ニ建テ置キタル瓦斯燈柱ハ遊戯ノ際左程障害ニハナリマセンガ少々妨害ニナル様テス加之無用ノ柱ヲ土中ニ埋メ置ケハ唯朽チルヲ待トミニシテ他ニ益ナキ様ニ思ハル故ニ寧ロ空ク建ヲ置カハ他ノ場所ニ移シテ如何

すなわち遊歩場に瓦斯燈の柱が残っており、それが遊戯等の際の邪魔になっていたようである。それを早急に取り除くなどの措置を要望している。また子どもたちが登・下校時に通る道路の整備も課題であった。次は1890（明治23）年10月21日（火曜）の日誌である。

學校ノ敷地ノ前部ニ方レル乃チ官道デシガ元來本校ノ堰ヲ填メタル所ガ土石ノ未タ足ラサル為メカ彼ノ堰跡ハ判然ト凹陷シテ自然一筋ノ堰ヲナセシモノ、如シ之レガ為メ近來雨天ノ際水ハ流下シテ其ノ一筋ニ溜リ人馬之ヲ攪乱スルガ為メ泥濘ヲ醸成スルニ至リ之カ為メ生徒モ儘々足部ヲ汚シニ至レルモノ、如シ依テ速ニ彼ノ凹地ニ土石ヲ填充センヲ望ム而ソ此ノ方法ハ學校ノ庭前ニ散在セル石等ヲ運搬シテ之ニ充ツレバ容易ニシテ完全ナルヲ得ベシ乞フ速ニ一令アランヲ望ム

すなわち学校前の道路は凹地や穴が多くあり、雨天の時などは「泥濘ヲ醸成」するので、校庭に散在している小石等で充填するなど対応策を講ずるよう要望しているが、そのことを理事者にも訴えている。次は1891（明治24）年9月28日（月曜）の日誌である。

經費有無ハ予敢テ知ラズ然レモ勢止ムヲ得ス僅々ノ入費ヲ理事者ニ請求セサルヲ得ズノハ外ナラズ今ヤ当面道路修繕ヲ加ヘ既ニ砂石ヲ積ミ堅メ恰モ俗人ノ云カ如ク形出来テ結構ナレモ學校ノ橋ト街道トノ間ニ凹所ヲ生シ随

テ雨天ノ際泥水溜止シテ泥海ヲナシ為ニ生徒往來ニ困難ヲナセルハ予カ蝶々ヲ待タス徒費ノ明知セラル、処故ニ之ノ儘秋冬ニ臨メハ常ニ雨天頻ナリ依テ研石一駄橋ト街道等ノ間ニ盛ランヲ希望スル所ナリ若シ之ヲシテ全タカラシメハ生徒ノ幸福大ナリト云フベシ

(3) 外見上、風紀上の観点

学校における生徒たちの遊びについては、怪我などの危険性の観点ばかりではなく、外見上、風紀上の観点からも問題にされていた。ひとつはお客が出入りする玄関口での遊びを禁止することであった。『記録簿』に以下の記述がみられる。

玄関ニテ遊戯スルノ風ハ外見モ如何カと思ル、之ヲ止ムルヲ御説諭アリタシ（明治20年10月31日）

玄関廊内（四柱ノ中）ニ於テ遊戯スルヲ禁スヘキヲ御教示アルヘシ（明治23年4月10日 木曜）

今日ニ至リテハ生徒ノ遊戯スル場所ハ勿論生徒扣所ニ於テスルナルニ何分生徒ノ本校玄関先ニマテ侵入シテ之ヲ制スレハ散ジテ亦來ル來レハ復タ追ハレ実ニ腐破物ノ蠅ヲ追フニ異ラス実ニ此ノ様ニテ実ニ本校ノ管理上一ノ欠点タルモノ、如シ故ニ希クハ曾テ規約セシ如ク本校全体ニ之ヲ守リ之ヲ実行シ生徒一人タリモ生徒ノ壯幼ニ関セス其男女ヲ問ハス全校訓導一致協同シ規定ノ通り乱リニ生徒入口ヨリ東部ヘ侵入セザランヲ望ム（明治23年9月22日 水曜）

玄関口ニ於テ遊戯ヲナシ居ル生徒アリ（一二年生多ク見当レリ）嚴重ニ御説諭ヲ乞フ（明治24年10月21日 水曜）

近日春ノ暁ニつれて庭の桜も花を含ミ池中の鯉も躍り出てんとする時節にも相成りたり…自然生徒等ハ玄関前ニ來リ彼の墨手汚手を其俣四階桜の其柱なる太柱を握り…汚点を生じ外見誠ニ又注意以て見悪ク思はる依テ庭前遊

戯の際には玄関下ニ来る事を禁じては如何
右等ハ嚴重ニ御禁制ヲ乞（明治25年4月6日
水曜）

また他校の遊惰生等が学校内に出入りしており、それが風紀上の乱れを惹起していることが指摘されている。1890（明治23）年5月22日（木曜）の日誌に次のようにある。

本校ノ遊歩場へ時間外又ハ授業時間中ニ高等
小学校ノ生徒ラシキモノ或ハ近隣ノ遊惰生ノ
如キモノ漫リニ魚市ノ破レタル壁ヨリ入り来
ルヲ屢、見ケマス又甚タ以テ不埒千萬当校ノ
不注意一日シテ見透サル、甚以テ氣ノ毒ナル
次第故兎二角ニ周囲ノ破損ヲ至急修繕ノ上当
局者ニ於テハ一層御注意ヲ願マス当小使ニ嚴
重注意ヲ命セラレ犬猫類ハ一切本校へ出入ヲ
禁セラレタキモノナリ学校ハ素ヨリ威厳モナ
クンハ德育モ其功ヲ奏セズ諸君以テ如何トナ
ス言評ヲ乞フ

他校の生徒等が学校内に侵入しないように、学校の塀の破損等を修理するよう学校当局者に訴えている。また犬猫類の侵入を許しているようでは、学校の「威厳」も失われ、德育も効果を奏すべくもないと述べている。いかにも学校の威厳を重んずる記述ぶりには、戦前に顕著であった学校神聖観が表われているといえよう。

その他、学校の風紀にかかわる生徒の行状として、学校の壁等への落書き、遊戯中の生徒の氣勢や野卑な言動、手鞠等における卑猥な歌謡、賭博、登・下校時の行状等があるが、それらについては紙数の関係で稿を改めることにする。次に和徳小学校生徒の、校舎内における遊びを含めた行状について考察することにする。

3. 校舎内(特に生徒扣所)における生徒の行状

(1) 校舎内(特に生徒扣所)における遊び

『記録簿』には、生徒たちの校舎内における行状については、より多くの記述がみられる。まず校舎内での遊びであるが、次は1887（明治20）年11月8日の日誌である。

生徒獨樂ヲ玩ハ悪シキヲニアラザレモソノ中
ニ投廻シト称スルモノアリテ見ニ他生ノ足ニ
傷ケタルヲ見タリ且ツ教師ノ居床又ハ机上等
ニ廻セルヲモ見タリ全体扣處ナキヲ以テ廊下
モ常ニ入込ナレハ校舎中ニテハ何レニテモ余
リ善キヲニアラザレモ投廻ナルモノハソノ中
ニモ悪シキモノト思ハル、カラ右ノ内何レカ
禁止シテ如何テ御坐マス

文中「扣處ナキヲ以テ」とあるように、当時はまだ校舎が新築される以前で、生徒扣所もなかった。したがって生徒たちは校舎内の至る場所で行きわたる遊びをおこなっていたようである。そして上記のように独楽遊びもみられた。日誌には、独楽遊び自体は決して悪い遊びではないが、ただ「投廻シ」は他の生徒に怪我を負わせたり、器物等を損する危険性も高いので禁止するよう提案している。『教育報知』に「遊戯の奨励を務むべし」と題する論説があるが、「危険過激」な遊びと「粗野卑猥」な遊びは避けるべく、「彼の独楽運びの如きは、極めて危険なるを以て、厳しく禁ずべく、ブランコ、ベースボールの如きは、児童の悦ぶ所なれども墜落毀傷の虞多し。故に之をなさしめんには、教師は必ず監視せざる可らず。又旗取競争の如きは、勇往敢為の氣象を養ふべく、方形行進の如きは、秩序を重んずるの氣習を起すべく、唱歌行進の如きは、優美の心情を促すべし。」⁽²²⁾と、「独楽運び」は危険な遊びであると述べている。

次は1887（明治20）年11月12日の日誌である。11月というと寒さも一段と厳しさを増す時期であるが、冬季の積雪期においては戸外での遊びも制限され、また校舎内といっても遊戯場等も完備していない状況のもとで一体いかなる室内遊びが適当か、自身の意見を述べるとともに各教員の意見を求めている。

最早ヤ寒モイヤ増シテ岩木高峯モ白妙トナリ
ヌレハ兎角戸外ノ遊戯モ致シカネ又戸内遊戯
場モ無コトナルハ児童ハ此迄ハ相違ヒ心氣爽
快ヲ覺ルノ風ハ不足ナリサラバトテ今新ニ建
物ヲ築造セントイフコトモ出来サレハ何分善
キ遊び方モアラナンカ皆様ノ腦裏ヨリ御出シ
ハ申シタキコトナリ小生ハ今ノ考テハ學術ニ

関係アル骨牌子ヲ取ラレタルトカ又教師カ種々ノ勇氣ノアル話カ西洋文明ノ物語カ、イト興味アル談話ヲ火鉢ニ手ヲ煖メツ、講スルモ一助ナルカト心ニ浮カベリ尚ホ遊戯取調ノ方々モ特別ニ立チ居ルコトナレハ不日ニ良法ヲ見ルノ日アラント思ヒマスカ今考ヒ付キタル俚書き記シヌ

当時は未だ校舍新築前で、活発な動きを伴う遊びのためのスペースは不足な状態であった。したがって学術に関係ある「骨牌子」や、教師による種々の「勇氣ノアル話」や「西洋文明ノ物語」など、生徒の興味を魅くような談話等が提案されている。前掲の「児童の精神教育」と題する記事にも「児童の天性快活にして、時に或は山野を馳せ回り、時に或は種々なる遊戯をなし、時に或は昔話などを聴きて、無上の快樂となすは、児童が平生の状態なり。」⁽²³⁾と、戸外での運動遊戯のほかは「昔話」など、児童の嗜好にも合い、精神教育上にも有益であると述べ、また「歴史、小説、及少年書類の、児童に解し易くして、趣味多きものを撰みて、之に与ふるは、蓋し甚だ必要なることならん。」⁽²³⁾と、児童の理解しやすい、また興味ありそうな読書も推奨している。

ところで和徳小学校では1888(明治21)年春には新校舍が完成、生徒扣所も出来るが、そこを舞台にいろいろな行動がみられるようになる。校内で禁止された独楽廻しも、生徒扣所が出来ると、そこでおこなっていたようで1892(明治25)年11月1日(火曜)の日記に「生徒扣所及群集之中ニテ独楽廻シヲ禁ス」と、再度忠告している。1888(明治21)年5月4日の日記には「校内ニ於テラッパヲ吹クヲ禁ジタシ」とある。そこにはただ「校内」とあるだけで場所は不明確であるが、とにかく校内でのラッパの吹奏はやめるよう提言している。それでもやまなかったようで、同月24日の日記に再度「ラッパハ生徒ニハ特ニ害アルモノト認メマスカラ吹カサル様説諭アリタシ」と記されている。ラッパの吹奏は、騒音であるばかりか、心肺機能が未発達な小学生にとっては健康上も害あるものと考えられていたようである。生徒扣所でベースボールをおこなうことは禁止したことは前述したところである。また扣所で指を吹

き鳴らす生徒もいたようで、1891(明治24)年9月11日(金曜)の日記に「扣所内ニテ指ヲ吹き鳴ラスヲ禁シタシ」とある。

ところで生徒扣所は、生徒が授業時間以外の大半の時間を過ごす場所であるが、扣所での生徒の行動規範については学校としても一定の方針を定める必要は認識されていたようである。次は1888(明治21)年12月15日(土曜)の日記である。

当校扣所ハ遊戯場兼務ノ事ナレハ整肅ヲ要セサルモノカ果シテ然ラハ之ヲ管理スル難キニ非スト雖トモ扣所トシテ之ヲ見レハ実ニ困難ナルベシ其性質ヲ研究シ且ツ其遊戯方法ヲ定メタキモノナリ然ラサレハ甲ノ咎ムルトコロ乙之ヲ免ス等ノ不都合アレハ教師ノ威儀徳望ニ於テ非常ノ差異ヲ生シ共同聯進ノ意ニ背クノ恐アルナリ

すなわち生徒扣所は「遊戯場」も兼ねているとすれば、ただ「整肅」を求めるだけでなく、ある程度の遊戯も致し方ないであろうが、ともかく教員の間でも方針が一致していなければ「共同聯進」の趣旨にも反すると述べている。実際、扣所においてはいろいろな遊びがみられた。また次は1891(明治24)年6月8日(月曜)の日記である。

生徒扣所ノ管理ハ嚴重ニセラレ又巡視番ノ方ハ篤ク心得ラレ終始巡視セラレ生徒ノ監督ニ注意セラレンヲ望ム生徒扣所ニ於テハ左ノ遊戯ヲ禁ジタシ

- 一 鬼追ノ類
- 一 立相撲ノ類
- 一 駈競ノ類

すなわち鬼追、立相撲、駈競等のような動きの激しい遊びは、生徒扣所に於いては禁止するよう意見を述べている。それらの遊戯は、1で考察したように、戸外での遊戯としては広くおこなわれていたものであるが、和徳小学校においては扣所でおこなっていたのであろう。ともかく活発性は子どもの本性である。生徒たちが狭い扣所内を走り回るといことは日常茶飯事だったようである。次は1893(明治25)年10月28日(金曜)の日記で

あるが、生徒扣所における生徒たちの行状について実に詳細に記録している。

時季既ニ秋ノ末ニモ近キ戸外遊戯ニ適セサルハ勢ノ免レサル所左レバニヤ生徒ハ皆ナ扣所ニ群集シテ肩相磨シ足相踵ム是亦タ止ムヲ得サルヲニモ衛生上ヨリ論ズレハ其害数フルニ暇アラズト雖モ本校ノ隆盛茲ニ至ルヲ思ヘハ大ニ賀ヘキヲニモ誠ニ喜ブベキナリ然レモ物夫レー喜アレハ一憂生ズル天数ノ免レサル所カ予其ノ扣所狭隘ナルヲ付キ諸君ノ御注意ヲ煩ハサント欲ス否ナ獨リ狭キカ為メニ非ス生徒ノ舉動ニ付注意ヲ乞フノミ然ラハ生徒舉動ニ如何ナル注意ヲ要スヘキカ他ニ非ス彼壯年輩ノ東西南北ニ狂奔駆走取テ他生徒ノ妨害ニ毫モ注意セサルヲ予其ノ動作ヲ熟視スルニ先ツ女生徒ハ組針ヲ手ニシテ顔前組ツ、アルニ夫等生徒ノ前後左右ヲ問ハス幼弱老壮ヲ撰ハス忽然トモ其ノ上ニ倒レ来ルモノ数多アリテ彼ノ組鍼ニテ眼及顔部ノ一部ヲ衝カントスルモノアリ或ハ顔ヲ□□磨スルモノモアリ実ニ男生ノ壯健上ヨリ論ズレハ或ハ益スル所アルモ亦タ知サレモ否ナ手ヲ折り足ヲ毀クヲ知ルハ今更喋々ヲ要セス然レバ乃チ此遊戯ヤ公衆ノ害アルヲ以テ己ノ利益ヲ論ズベカラス速ニ嚴命ヲ下シテ彼ノ大将□トカ相撲トカノ類ヲ禁ジタキモノナリ尚障子ヲ入レタルヲナレバ其修繕モ亦タ頻繁ナランカ諸君以テ如何トナス敢テ公論ニ決センノミ

すなわち上級生徒たちは「東西南北ニ狂奔駆走取テ他生徒ノ妨害ニ毫モ注意セサル」有り様で、女生徒たちが組針を手にしていているところに転倒してくるなど、まさにその騒然たる情景が眼前にありありと浮かぶようである。特に上級生の横暴な行動は目に余るものがあつたようである。同年11月1日（火曜）の日誌にも「四年小館生ハ扣所乱走スルアリ危険ナリ一論ヲ乞フ」とある。なお上級生の横暴な行為は、扣所内だけではなく、校舎内の広い範囲においてみられた。

(2) 上級生(階上)の下級生(階下)に対する横暴、悪戯

校舎が新築されると、旧校舎が生徒扣所にあてられ、二階が上級生（3・4年）、一階が下級生（1・2年生）の生徒扣所となった。そして日誌をみると、以下に列記したように、階上の上級生が、階下の下級生に対して紙屑などいろいろな物を落としたり、唾を垂らしたりなど、いろいろな悪戯をはたらいていた。

巡視番之諸君左ノ件ニ御注意アリタシ 二階上ヨリホ、ヅキナドノカラ及紙屑ナドヲ投ケ棄ツルヲ外ヨリ格子ニ攀登ルヲ（明治21年10月2日）

櫻上ヨリ遊歩場へ唾ヲシテ近々他生ヲ汚ス者アル由訴ヘ出テタルアリ 櫻上ナル諸先生一度御嚴命アリタシ（明治22年5月9日 火曜）

櫻上ナル生徒欄杆ヨリ下リ又階子ヲ登ラス欄檻ニ踏リ登リ又ハ桜上ヨリ階子ノ入口ニ足ヲブラ下ケ各生ノ頭上ニ觸レシメタルモノモアル由甚タ失敬ナル行為ニ付キ三四級ノ諸先生御嚴命アリタキモノナリ（明治22年7月1日月曜）

生徒扣所櫻上ヨリ櫻下ニ糸ヲ垂下シテ悪戯ヲナスモノアリ嚴重御諭誠アリタシ（明治23年2月13日 木曜）

教師は、それら横暴な生徒を捕らえようとするが、即座に群衆のなかに逃げ去り、なかなか捕まえることさえできない始末であつた。次は1891（明治23）年8月13日（水曜）の日誌である。

曾テ樓上ノ扣所管理ノ責任者諸賢ニ一度御注意ヲ願ヒマシタカ何分今ニ其教訓ノ実功ヲ見ズ樓上ノ敷板間隙ヨリ樓下ニ遊び居リタル生徒ノ頭上ニ唾液ヲ乱下スル不正ナルノミナラズ甚タ失敬ナル挙動ヲナシモノアリ依テ直ニ樓上ニ登リテ其ノ不正者ヲ驗スルニ多数生中故彼ノ所謂失敬ナルモノハ何分相分ラズ併シ若シ此ノ如キ生徒ヲ寛恕暗免スルニ至ラハ

遂ニ其悪情ヲ増加ス猛進スルニ至ルモ凶ルヘカラズ此ノ時ニ当リテ前時ヲ悔ユルモ何ノ益ナシ噫呼樓上ノ諸賢嚴重御説諭アリテ可然ト察セラル猶其場所細論スレハ三年生ノ扣所ノ様ニ考ヘラレマス当任諸賢幸ニ嚴重ノ説諭アランヲ実ニ生徒ノ挙動ハ教師ノ反響ナリト幸ヒニ察セラレンヲ

一 扣所東方ノ窓ヘ簾ヲ懸ケタキモノナリ全体ニ行キ届カズバ東方ノ入口ナル戸ノ代リ丈モ之ヲ用キルハ大ニ扣所ニ居ル生徒ノ氣鬱ヲ慰スルカト考ヘラレマス加之空氣ノ流通モ宜シカラム

一 樓上ノ扣所 生徒ハ自己ノ扣所モ在ルニモ関ラズ漫リニ他級ノ扣所ニ乱入シ縦横無人ニ走完シ觀トモ他人ノ妨害アルモ顧ラズ 又其ノ評ノ虚ナラサルヲ信ジ若シ愈以心情ヲ徒問ニ付シテ之ヲ矯正教諭セザレバ他日如何ナル他人ノ權利ヲモ犯スニ至ルヤモ凶ラレズ依テ其末タ甚シキニ至ラサルニ先チ其不正ナル萌芽ヲ引キ抜カンヲヲ

同年9月27日(土曜)の日記も次のように詳しい。

元来本校各級ノ扣所既ニ己ニ樓上樓下ニ配置セラレタルハ諸君始メ生徒モ亦タ熟知スル所ニシテ生徒等其分置セラレタル場所又ハ樓上ハ樓上ノ区域内ニ於テ遊戲スル勿論ノ義ニシテ嚴重ニスレハ其級ノ区域内ニ限ルニモ関ラズ近來ノ如キハ縦横老馳人無キカ如ク遂ニ樓上ノ扣所ハ自分ノ扣所ナルニモ関ラズ漫リニ樓下ニ走り來り幼年ノ薄弱ナル生徒ヲ推破リ或ハ倒シ或ハ踵ニ付之レカ為メ若年ノ生徒鳴クモノアリ訴フルモノアリ実ニ強者ハ其力ヲ頼シ弱年生ヲ壓スルノ風アリ実ニ他人ノ權利ヲ害シ自己ノ美佳ヲ失ヒタルモノノ如シ若シ此ノ惡風ヲ矯正説諭セスンハ悪性ヲ増長シ知ラズタノ間ニ其習慣ハ以テ性質トナルニ至ラバ其責亦誰ニカ帰センヤ教育ニ擔任セラル、人ニアラン依テ仰キ願クハ樓上諸君勿論懇々御説諭アルニモ関セズ尚一層御説諭アリテ可然ト存セラレマス予斯之云ハ、恐ラクハ言ハン樓下ニ來リテ法ヲ犯サバ其場ニ所理シテ可

然ト夫レ然レモ忽然ト樓上ヨリ走り來リ一時蹂躪シテ漂然トモ亦タ罷リ歸リ樓下ノミニテハ難ギスル所ナリ故ニ樓上諸君ニ於テ此ノ如キ挙ナカランヲ願

上級生の横暴な行為、不行跡に対しては、教師がその都度厳しく「矯正説諭」をしなければ「悪性ヲ増長シ知ラズタノ間ニ其習慣ハ以テ性質トナル」と注意を促しているが、なかなか容易には無くならなかったようである。1892(明治25)年10月10日(月曜)の日記にも上記と同様の記述がみられる。

近頃亦タ樓上ノ勇壯活発ナル生徒ハ漫リニ幼年生乃チ樓下ノ扣所ニ乱入シ東西南北ヲ問ハズ奔走蹂躪シテ弱年生ヲ壓倒ノ憂アリ甚以テ危険ナル様ニ相見マス依テ樓上ノ受持諸君右ノ憂無キ様御説諭アランヲ望ム

(3) 危険な遊び、転倒等による怪我や喧嘩争論

上級生による悪戯のほか、怪我の危険性のある行為もいろいろみられた。次は1892(明治24)年2月28日(土曜)の日記である。

近來一年生ヲシキ生徒ハ二階ノ梯ヲ倒ニナリ両手ヲ以テ足ニ代用シ階ヲ降ルモノ往々之レアリ或ハ四五段上ヨリ尻ヲ滑下シテ恰モ坂ヲ滑ルカ如キ遊ヒヲナシ居ルモノアリ実ニ以テ危難モ亦甚シキヲ非スヤ噫呼一朝若シ過シキハ脊髓骨ヲ破傷スルニ至ラン然レハ乃チアツタラ性命ヲ亡フニ至ルヤ火ヲ見ルヨリモ明々照々タリ実ニ脊髓神經ノ吾人生命ニ関係スル素ヨリ予カ蝶々ヲ待タズ然リ而シテ其ノ階ヲ滑落低下スルヤ獨リ其ノ尾底等ノミナラズ或ハ貴重ナル頭部ヲ打傷破塞スルノ凶ルベカラズ実ニ危険モ亦タ甚シカラズバ依テ一年二年ハ勿論本校一体ニ一度訓戒アリタキモノナリ

すなわち二階から梯子を使って滑走するなど、実に危険な遊びをしており、脊髓や頭部等を大怪我する危険性があるので、即座にやめさせるよう教師に「訓戒」を求めている。また次は同年4月

16日（木曜）の日誌であるが、低学年児童がガラス管を弄び、時に口に含んだりしていることを指摘している。

幼年生ニ近頃ガラス管ヲ弄ビマヽ口ニ含ミ居リテ遊ブヲ見受ケ説諭シマシタガ若シヤ馳走成ルカ如キ場所ニ於テ万一衝当リナバ又ノ別ノ害ヲ蒙ルカト考ラレヌ倒レヌ先ニ注意アリタキモノナリ之レハ至急ヲ乞フ

遊びのなかでの怪我も少なくなかったであろうが、また不意の転倒や喧嘩等による怪我もあった。1887（明治20）年12月7日の日誌に「午前九時二年級甲五十嵐順机ヨリ轉テ面部ヲ痛ケタリ」とある。当時はまだ新校舎が完成しておらず、生徒扣所はまだなかったの、おそらく教場（教室）においてのことであろう。1888（明治21）年春には新校舎の完成に伴い生徒扣所が出来るが、1889（明治22）年3月4日（月曜）の日誌には「午前二年生林壽衡ハ扣所ニ於テ誤テ墮倒シ面部ニ傷ケ…葉ヲ与ヘテ帰宅セシメタリ」とある。

また、次は1891（明治24）年2月2日（月曜）の日誌であるが、冬季には生徒昇降口に氷が堆積し、生徒たちが滑転して怪我するのを実際に目撃しているの、何とか対応するよう訴えている。

生徒入口ノ所氷ハ重積シニ半円体ヲ形ツクレリ随テ生徒出入ノ際誠ニ危険ナル様ニ相見ヘ獨リ見ユルノミナラズ往々生徒中ニ滑轉シテ些少ノ傷害ヲ受クルモノアルヤニ聞キ受ケタルノミナラス予モ亦実見スル所ナルヲ以テ一層小使ニ注意ヲ致サセタク存ジマス諸君如何

また子ども同士で相撲をとったり、取っ組み合いの喧嘩をして泥だらけになったり、衣服を破ったり、怪我したりすることも日常茶飯事だったようである。『記録簿』に、以下のような記録がみられる。

コノ朝一年級小野勝之進石火谷三郎扣所ニ於テ遊戲ノ際互ニ組ミ撲ケンカ誤テ小野生ノ左腕骨ヲ挫折セリ（明治21年7月3日）

遊戲ノ際生徒地上ニ相轉倒シ衣服ヲ汚シ又ハ相組合フテ衣服等ヲ破ルモノアリ而フシテ恬トシテ顧ミザレハ野卑ノ風習ニテ子供ト申ナカラモ不良ノフナリ是亦矯正シタキナリ（明治23年7月8日 火曜）

上掲の日誌には、生徒のそのような野卑な風習を改めるため、教師が身をもって模範の姿を示し、自然に感化せしめることと、その都度「誠訓」を加えることが必要であると次のように記されている。

凡テ生徒ニハ耻ヲ知り善ヲ感スルノ觀念ヲ與ヘ義ヲ重ジ善ヲ好ムノ人間タラシムルハ最重要ナルフト思フ又生徒ヲシテ已カ行爲ニ模擬セシメ自然ニ感化セシムル様務メタキモノニコソ左レバ不規律不始末ナル生徒アラバ時々刻々誠訓ヲ加ヘ屈撓止マザランヲ要スベシ然ラバ爰ニ始メ良結果ヲ得ベキナリ教育者ノ辛苦ト云フモノモ蓋シ此辺ニアルカト思ハル（明治23年7月8日 火曜）

すなわち「生徒ヲシテ已カ行爲ニ模擬セシメ自然ニ感化セシムル様務メタキモノニコソ」と記されているが、そこにはまさに率先垂範による感化、薫陶を重視した森有礼文相の教師観の反映がうかがえよう。⁽²⁴⁾ また1892（明治25）年の日誌には、次のように喧嘩、行状不良、暴力行為等に対しては戒飾、出校差止、説諭などの体罰処分をおこなったことが記されている。

四年級安田想吉岩坂英治喧嘩ヲナシタル件ニ付戒飾ヲ加フ（明治25年4月4日 土曜）

四年級小田吉博之助行状不良ニ付懲戒むの爲出校ヲ差止メタリ（明治25年4月10日 金曜）

三年生葛西生ノ舉動甚手荒キ風アリ漫リニ他生ヲ蹶坐アリ打ツアリ少ク御説諭ヲ乞（明治25年11月1日 火曜）

ところで和徳小学校では1887（明治20）年に「小学校則」を制定していたが、その「第四章

生徒心得」中に次のような箇条があった。

- 第九条 喧嘩口論ハ勿論猥りニ校内ヲ奔走シ
或ハ大声ヲ発シ或ハ戸障子壁等ニ戯書
シ 又ハ危険ノ遊戲ヲナスベカラス
第十条 学校所属ノ花果植物等ヲ折害シ又ハ
戸障子図書器械等ヲ破損スベカラス
第十二条 許諾ヲ得シテ他人ノ物品ヲ使用
シ又ハ賭博ニ類スル所為ヲナスベカラ
ス⁽²⁵⁾

ところで、考察してきたように、『記録簿』をみると、上の「生徒心得」に列記されている「喧嘩口論」や「猥りニ校内ヲ奔走」したり、「危険ノ遊戲」等は日常的に多くみられた。その他、「戸障子壁等ニ戯書」したり、「賭博ニ類スル所為」等もみられたが、それについては稿を改めることにする。そして同「校則」の第五章は「生徒懲戒」について、上記の「生徒心得」の条項に違反した場合、「譴責」、「直立」、「謹慎」、「留置」、「出校ヲ差止ムル事」等の体罰が課せられることが規定されている。上述の、「喧嘩」による「戒飾」や、「行状不良」による「出校ヲ差止」等の処置は、「校則」にしたがっての体罰処分であった。ところで『記録簿』でみる限り、生徒の問題行動に対する対処としては、大抵「説諭」「訓戒」「教諭」等であり、「出校差止」などは極めて重い処分といえよう。ところで体罰に関する日欧の比較研究等においては、西欧諸国は歴史的にも極めて苛酷な体罰によって特徴づけられるが、日本は口頭による叱責や説諭が主で、打擲や鞭苔など文字通りの体罰は極めて稀であったことが指摘されているが、⁽²⁶⁾ そのことは和徳小学校における体罰についてもあてはまるものであったといえよう。

なお事例はさほど多くなかったと思われるが、学校によっては刃物等による殺傷事件もみられたようである。『教育実験界』に「恠我の多き時季」との見出しで次の記事がある。

…嚴冬酷暑には季候の压抑を蒙りて自ら動作の活発を減ずれど、春初より初夏にかけては衣も薄くなりて輕快の動作に便なると、氣候快適にして身心の暢発を促すが為に、知らず識らず恠我をするものなるべし、故に、此の

時季に於ては、一方には類に無害の運動を生徒に奨励し一方には予め恠我なきやうに注意を与ふことを務めたり。又教師の許可なくしては、刃物を持参することを許さず、許可を得て持参すると、屋外に持出づるには更に認可を乞はざるべからざること、せり、斯くしたる所以は、曾て小刀にて他生を傷けたる児童ありしに依るなり。某校にては、十数年前、甲児は乙児をナイフにて刺殺せしことさへあり。…⁽²⁷⁾

また『教育時論』には「小学生徒の殺傷」との見出しで次のような記事がある。

三河国八名郡玉川高等小学校三年生阪本茂一は去る十三日同級生夏目喜鹿に對しつまらぬ問を起し、それが原因となりて互に言ひ争ひ、阪本は遂に小刀を以て夏目の背負へる書物に切り付けんとしたるが過りて其左方肋骨三枚目を深さ三寸余り突きて肺に達する位なりしかば夏目は其場に斃れたり、これを見たる阪本は大に驚き自ら自分の左側腹へ二ヶ所突き付け苦しみ居たる所へ人々駈付け種々手を尽したるも、夏目は遂に死去し、阪本も余程の重傷にて生命覚束無しといふ。因に右の椿事の起りし為め同郡内各小学校長は何れも生徒一同を集めて小刀其他の刃物を所持することを嚴禁したりと云ふ。⁽²⁸⁾

近年、ナイフによる殺傷事件が相次ぎ世間を騒がせたが、そのような事件は明治期の小学校においてもみられたのである。

4. 習慣形成の場としての生徒扣所の管理の問題 ——「訓練論」の展開——

さて和徳小学校の問題に戻るが、先程、生徒の不行跡や問題行動に際しては、教師がその都度厳しく「矯正説諭」しなければ、生徒の悪性を増長し、知らず知らずの間にその悪習慣が性質となるとの杞憂が述べられていたが、次の1888（明治21）年11月13日（火曜）の日誌にも、生徒扣所における管理如何が、生徒の習癖・習慣を形成する

上で極めて重要であるとの認識がみられる。

…元来扣所ノ管理ハ誠ニ大切ナル事ニシテ又教育上大関係アルヲ思フ蓋シ扣所ハ児童ハ思ヒノ遊戯行為ナスモノアリ喧嘩争鬭ヲナスモアルベシ若シコノ時ニ当テ管理其宜シキヲ得サレバ扣所ハ却テ児童不良ノ習癖ヲ養成スルノ場所トナルナラン生徒ノ衣類ヲ破リ戸障子ヲ破リタルヲ見テモ知ルベシ凡テ今日ノ教育ハ重ニ扣所及体操遊戯ノ際ハ習慣養成ノ材料トナスニ足ルト思フ若シ熱心ト慈愛ノ情トヲ以テ之ヲ管理セハ其効ヲ収ムル必ス大ナラン

前稿（注(1)）で考察したように、教室（教場）は授業の時にだけ入室する神聖な場所であり、授業時間以外には原則的に入室が許されなかった。したがって生徒扣所は、生徒たちが授業時間以外の大半の時間を過ごす場所であり、まさにふだんの居場所であった。したがって扣所等における生徒たちのふだんの行動や休憩時間、放課後等における体操遊戯等はまさに「習慣養成^(ママ)ノ材料」なのであり、その習慣養成という観点から生徒のふだんの行動に対する教師の監督と指導の重要性が強調されていくことになる。そして、そのことを怠っている教師の実状が批判されることになる。すなわち1891（明治23）年12月18日（木曜）に次のような記述がみられる。

扣所ニ於テ各級生徒（特ニ樓上ノ生徒ハ然リ）ハ危険ナル遊戯ヲナシ身体ヲ傷メ又ハ椅子等ヲ破壊スルヲアレバ能ク御教訓ヲ加ヘラレタシ又巡視番ノ方ハ充分御注意アリタシ
来月一日開校式日ニ優等生ハ褒賞授與スベキニ付御受持生徒優等ノ者御取調アリタシ自己ノ身ヲヒズリテ後チ他人ノ身ヲヒズレトハ古人ノ明言予自ラ己レヲ顧ルニ巡視番ノ日ニ当リテ其責任負擔ノ扣所ヲ巡視シテ生徒ノ挙動ニ注意スヘキハ勿論ノ議ナルモ何分其様ニ斗リ行カザルハ往々之アリ実ニ近來新聞ノ輻輳スル為メ己レ巡視ノ責アルニモ関ラス巡視ヲ放棄シテ新聞ヲ見其他色々ノ事件ヲ徒間ニ附スルノ風アリ之カ為メ生徒モ儘其ノ負傷常ノ

事ヲ顕出スル様ニ考ヘラレマス依リテ予以前巡視番ハ教員扣所入ラサル位ノ責ヲ負ヒ食事モ生徒ト一同シタキマテニ発言致マシタカ何分サウハ行キマセンガ願クハ巡視番ノ方ハ不得止事故アルニ非サレバ教員室ニ入ラサル様ニ致シタキモノナリ実ニ近々火鉢ノ為メ負傷者ノアルアルハ往々免レザルカト考ヘラレマス然レバ未タ此ノ可悲可愁ノ事情ヲ見サル内ニ巡視番ノ方ハ本校一同協心シテ其ノ功ヲ見タキモノナリ聊カ老婆心ヲ吐露シ合セテ身自ラ戒ムル所アラントス諸君幸恕

すなわち生徒扣所を巡視し、生徒の挙動に注意を向けるのは巡視番教員の任務であるが、その責を怠って、教員室で新聞等を読み、いろいろの事件が生じてても徒間に付している状況を非難しているのである。なおそのような状況は、全国多くの学校でみられたもののようである。「教師ノ遊戯場児童ニ於ケルハ監獄吏ノ囚徒ニ於ケルガ如クナルヘカラズ」と題する『教育報知』の記事は、次のような教師の実態を報じている。

教授中各時間終業ノ鐘報一タビ各教場ニ響クヤ各教師ハ我後レジト争テ生徒ヲ遊戯場ニ率キ出シ別レノ一声ヲカケ其俣生徒ハ捨テオキテ己ハ走りテ控所ニ入り煙草ヲ吸ヒ新聞紙（絵入新聞カ政党上ノ新聞）ヲ読ミ或ハ猥褻ノ談話ヲナシテ笑樂シ喧噪雑沓（甚シキハ夏日ハ上衣胸衣ヲ脱キ冬日ハ股火鉢ヲ用キルモノアリ）極リナキヲ以テ始業ノ鐘報ヲ聞クモ其声耳ニ入ラザルモノ、如ク終ニ課業時間ヲ誤ルテ少カラズ偶々生徒中争鬭負傷ヲナス者有テ教師ノ控所ニ申出ツレハ教師ハ其理由ヲ糺サス大喝一声其不品行ヲ責メ直ニ直立或ハ留置ノ罰ニ処ス又一二ノ教師遊戯場ニ出ツルモノハ鞭ヲ携ヘ或ハツボンノ垂袋ニ両手ヲ入レ威厳以テ無暗ニ生徒ヲ叱咤シ生徒ヨリ遊技ノ方法ニツキ教示ヲ乞フモ其方法ハ教ヘス唯眼ヲムキ出シテハケ間敷ト答フルノミニシテ恰モ監獄吏ノ囚徒ニ於ケルカ如キ取扱ヲ為スヲ以テ…⁽²⁹⁾

生徒の行状等に注意を向けることは怠り、何か

事態が生ずればむやみに苛酷な体罰手段に訴えるような、いわゆる「問題教師」は明治期にも少なくなかったようである。「放課時間を軽視す可らず」と題する『教育実験界』の記事は、教師の心得として次の3点をあげている。

- 一、放課時間には危険背徳ならざるよりも自ら率先して遊戯し労を慰し身体を強壯にすべし。
- 二、遊戯の時は児童自然の性癖を顕すを以て能く之を洞察して教育の参考にすべし。
- 三、修身科の実地練習場として常に遊戯間の行為に注意し勸善懲悪の手段をとるべし。⁽³⁰⁾

そして「真の重要な教育の効果は実に此間に収めらる、而るに常に控所に安居して児童を放任する時は、独り前述の効果を取むる能はざるのみならず、更に悪弊を児童相互の間に醸出せん云々。」⁽³⁰⁾と、授業時間以外の放課時間や遊戯時間等には、教師は率先して遊戯をおこない、また生徒の性癖等がおのずと発露しやすい遊戯時等の、ふだんの行動をよく洞察し、教育の参考とすること、そして勸善懲悪の手段をとるなどして行動を正していくこと等は、まさに「修身科の実地練習場」であると述べている。

ところで1900(明治33)年、第3次「小学校令」下の「小学校令施行規則」においては、「修身科」の趣旨について「修身ハ教育ニ関スル勅語ノ趣旨ニ基キテ児童ノ徳性ヲ涵養シ道德ノ実践ヲ指導スルヲ以テ要旨トス」⁽³¹⁾と述べられている。すなわち修身科の趣旨が、修身知識の教授といった知識教科ではなく、「道德ノ実践ヲ指導スル」教科、すなわち実践的教科という性格が付与されることになる。そのことと関連して、上に述べたように、すでに明治20年代から30年代にかけて、教師が、授業時間以外の、休憩時間における遊戯やふだんの行動にも注意を向け、問題行動等を監督指導し、善良なる習慣を育成していくことが重視されていく動向が看取されるが、それはまさに「訓練論」的教育方法観であるといえよう。

藤田昌士氏によると、教育方法としての訓育(訓練)概念は、「森文政下において、学校が担

う徳育にかかわって、修身科をはじめとする知識の教授とは異なる徳性訓練の筋道への着目」⁽³²⁾によって形成されていったことが指摘されている。すなわち具体的にあげれば、森文政期における教師の薫陶、模範による感化の重視、教室や学校だけでなく家庭や地域社会の教育力を重視する、いわゆる「教室外ノ教育」論、師範教育における三気質に代表される人物養成論、遠足、運動会、学校儀式など学校行事の重視、修身科試験における行状点の重視、教科書によらないで教師の「談話」による修身教育の方法等があげられるという。⁽³³⁾ また教育学書や教育方法理論の側面からみれば、明治20年代初頭にみられる修身教授と徳育の区別、また当時盛行した「学校管理法」書における「教化」(discipline)論や「躰方」論等に訓育(訓練)概念はその内実がみられたこと、そしてヘルバルト教育学の導入を契機とする「教授」(Unterricht)と「訓育・訓練」(Erziehung)の類別化、さらに明治20年代後半から30年代にかけて次第に一般化していく「教授」・「訓練」・「管理」という教育方法の類別等により、教育方法の理論としても確立していったことが指摘されている。

以上本稿では、和徳小学校の学校日誌『記録簿』を資料に、授業時間以外の休憩時間や放課時間等における生徒たちの校舎内外における遊びをはじめ、いろいろな悪戯、喧嘩争論など、ふだんの行状とそれらに対する教師たちの対応、指導監督の状況等について考察してきた。そして『記録簿』にも記されていたように、特に生徒扣所における生徒の行状や休憩時間における体操遊戯等を「習慣養成ノ材料」ととらえ、教師が日常的に監督指導し、問題行動についてはその都度説諭するなどして矯正し、善良の習慣を形成していこうとするその教育方法意識、教育方法観は、まさに「訓練論」の展開として位置づけることができるであろう。

注

- (1) 拙稿「和徳小学校日誌『記録簿』にみる明治20年代の学校管理に関する考察——特に教室(教場)と生徒扣所の管理を中心に——」『弘前学院大学地域総合文化研究所紀要 第12号』2000年6月
- (2) 『復刻版 小學讀本 一』(唐澤富太郎蔵版 毎日エディショナルセンター 昭和47年)4～5丁。同教科

書には、性別に応じた遊びについて述べられているが、性別観念が濃厚であった明治期のわが国でも、実際に子どもの遊びは性別によってかなり異なっていた。例えば『岩手学事彙報』に次の記事がある。「学校生徒の遊戯時間に運動場に在りて、遊び居る様を見るに走るもあり相撲類似の戯をなすものあり、鞆に上るあり、シーソーに乗るもありて、其様種々なりと雖も、女子の如きハ、右の活発なる遊戯をなさず地上にドッサリ坐して、毬つき或は石拾ひ杯をなす者あるを見る」(『学校には藁席を備へ置くへし 或老婆』『岩手学事彙報』261号明25・5・1519頁)

- (3) 同上書 8丁
- (4) 同上書 15丁
- (5) 同上書 20～21丁
- (6) 「児童ヲシテ学校ヲ信愛セシムベキ方法 茨城 郡司篤則」『教育時論』46号(明19・7・25) 10頁
- (7) 『明治以降教育制度発達史第二巻』203頁
- (8) 同上 184頁
- (9) 『資料 日本現代教育史 4 戦前』三省堂 1979年 81頁
- (10) 『江木千之翁経歴談 上』江木千之翁経歴談刊行会 昭和8年 56～7頁
- (11) 「児童の精神教育」『教育時論』161号(明22・10・5) 28頁
- (12) 「小学生徒遊戯方に就きて 並井堂主人」『教育報知』265号(明24・5・20) 5～6頁
- (13) 「遊戯場ノ利用(郵寄) 大坂 沢田精雄君」同上誌 132号(明21・8・18) 5頁
- (14) 「休憩時間の運動場 佐賀県 橋川熊五郎」『教育時論』699号(明37・9・15) 35頁
- (15) 「休憩時間に於ける児童取扱法」『教育実験界』第14巻 第9号(明37・11・10) 21頁
- (16) 同上 23頁
- (17) 「児童の悪弊を改めしむる一法 千葉師範学校付属小学校主事 小池民次」『教育実験界』第2巻 第8号(明31・11・25) 22頁
- (18) 「適当なる遊戯法 柴原金吾」同上誌 第6巻 第12号(明33・12・25) 23頁
- (19) 「随意遊戯 古家齊」同上誌 第6巻 第3号(明33・8・14) 32頁
- (20) 「新年の娯楽と教育。磯部武者五郎」『教育報知』624号(明33・1・1) 8頁
- (21) 「雪国に於ける児童の遊戯」同上誌 654号(明37・2・15) 5頁
- (22) 「遊戯の奨励を務むべし 埼玉県 羽山好作」同上誌 611号(明32・6・3) 9頁
- (23) 注(1)と同じ 28頁
- (24) 拙稿「森文政期における修身科口授法の採用とその教育観的背景——実物・教具としての教科書観と「儀範」としての教師観——」『弘前学院大学・短期大学紀要 第20号』1984年3月
- (25) 千葉寿雄著『小学校現場の百年』(津軽書房 1975年) 130～31頁
- (26) 16世紀に日本を訪れ、当時の生活習慣や風俗について観察記録をまとめたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは、「われわれの間では普通鞭で打って息子を

懲罰する。日本ではそういうことは滅多におこなわない。ただ〔言葉?〕によって譴責するだけである。」

- (『ヨーロッパ文化と日本文化』ルイス・フロイス著 岡田章雄訳 岩波文庫 1991年 64頁)と指摘している。また沖原豊著『体罰』(第一法規 1980年)では、教育法規上、体罰を肯定容認しているか否定しているかにより、肯定の英米型、否定の大陸型と社会主義型の3類型に分類している。それらの方針の思想的背景として、英米等ではキリスト教的原罪観、性悪説の人間観が底流していること、またヨーロッパ大陸諸国も元来はそうであったが、フランス革命等を契機に人権思想の影響等により現在は禁止の方針となっていること、社会主義国は、規律を重視するが、それは子どもに自律的に守られるべきもので、他律的な体罰という方法に否定的であることなどを指摘している。わが国は古来、子宝思想など、性善説の人間観、児童観が強く、子どもの躾や体罰も極めて温和なことが特徴であった。『教育報知』587号(明31・8・7)に「学校児童の体罰 埼玉 羽山好作」と題する記事があるが、わが国では「鞭撻」のような身体的に苛酷な体罰は避けるべく、体罰の種類としては「隔離」「直立」「留置」が適当であることを述べ、それぞれの体罰を課す場合について述べている。まず「隔離」について「彼の教室内に於て、隣生に談話を交へて受業の妨害をなし、又は種々悪戯をなして、隣生を苦しましむるが如き、不良の行為をなす児童をして、他生より隔離せしめて、教師の位置に接近せしむる如くし。或は遊歩場に於て、他生の遊戯を妨害し、又は種々の悪戯を教ふるが如きものをして、他生に接触せしめざるため、放課時間中自席に黙座せしむるが如し。」とある。次に「直立」の場合について「直立せしむる場合は、授業中乱雑喧擾にして、之が妨害をなすものは、自席又は教室内に、又遊歩場に於て、乱暴過激にして、他生の遊戯を妨げ、諸物を損害する如きものは、遊歩場中、又は教員室に直立せしめ、以て其の自由を束縛せしめ又行進中不規律にして、私語雑談する如きものは、其の場に直立せしむる等、犯則の行為を酌量して、適當の時間内之を与ふるにあり。」とある。そして「留置」について「此の罰は学校往復の途次、年少児童を虐待し、或は喧嘩口論をなし、為めに始業時に後れ、或は終日課業に怠慢なるものに適するものなり。」とある。(9～10頁)
- (27) 「実験百話 恠我の多き時季」『教育実験界』7巻5号(明34・3・10) 30頁
 - (28) 「小学生徒の殺傷」『教育時論』730号(明38・7・25) 39頁
 - (29) 「教師ノ遊戯場児童ニ於ケルハ監獄吏ノ囚徒ニ於ケルガ如クナルヘカラズ 大東生」『教育報知』70号(明20・6・11) 11頁
 - (30) 「放課時間を軽視す可からず 山城相衆 多氣善之助」『教育実験界』第2巻 第4号(明31・9・25) 54頁
 - (31) 『明治以降教育制度発達史 第四巻』61頁
 - (32) 「明治二十年代における訓育(訓練)概念の形成 藤田昌士」『学校教育学の基本問題』細谷俊夫編 評論社 1973年 239頁
 - (33) 注(24)掲出拙稿参照。

(稿了2000年11月30日)